

全国土を考える会 第8回総会



開会挨拶は前田喜芳会長

▶1月29日
(滋賀県大津市)

各地区の活動をメインに 新生・スガノ農機と 再び二人三脚の体制へ

全国土を考える会(前田喜芳会長)

は1月29日に滋賀県大津市で第8回総会を開催した。北海道・東北・関東甲信越・北陸東海近畿・中国四国・九州沖縄の各地区役員を中心に集まった個人・法人会員と協賛会員3社より50名余りが参集した。なんといっても2017年12月に開催した前回総会との違いは、同年3月まで長らく事務局として会員とともに歩んできたスガノ農機(株)の面々が顔を揃えたことである。

開会挨拶に立った前田会長は、源氏物語より「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり——」の一節を引用し、約1年半に及んだ混乱期を念頭に置き、この世のすべての現象は絶えず変化していくものだと話した。そのうえで「変えてはならないこと」と「変えなくてはならないこと」があるとし、会員同士の学び合いの場はなくしてはならないが、SNSなどの新たなツールが会員同士の交流をより深めていることを評価した。

最大の審議事項はこ



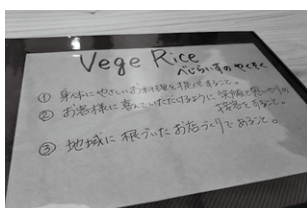
全国役員が前に並び、総会の進行を務めた



有るシオールファーム・べじらいすの店内の様子



豪華なランチプレート



メニューに記載された「べじらいす」のモットー

れからの活動方針だ。全国組織は発足してから8年が経過した。2018年度は全国事業が休止した一方で、北海道から九州まで6つある各地区土を考える会がそれぞれ活動再開にこぎ着けた。地区によって事情は異なるものの、地域の仲間が集う場所が復活したことにより、まずは地区の活動を活性化しようという機運が高まっている。そこで、ひとまず全国組織は一旦活動を休止し、土を考える会は6つの各地区土を考える会のネットワークとするという方針を採決した。

同時に、新経営陣の下で刷新を進めるスガノ農機に対して、会員らは再び一緒に活動したいという要望を全国各地で上げていた。同社の渡邊信夫社長が各地区の活動にスガノ農機としても営業所単位で協力する旨を了承されたことで、再び二人三脚で会の発展を目指す体制が整った。総会後の情報交換会の場では、再会を楽しみ、混乱の終焉に安堵し、

尽力した役員を労う姿があちこちで見受けられた。

18年夏にオープンした 農家レストランの視察へ

総会・情報交換会で懇親を深めた翌30日には「18年7月にオープンした今井さんの農家レストラン『べじらいす』を訪ねたい」という要望を受けて、視察した。有るシオールファーム代表取締役の今井敏氏は、「農家の原点は地域の人たちに認めてもらうことだと思う。地域農産物を食べてもらい、美味しさを伝えたかった」と開店理由を話した。若い頃の人より大きな機械を振り回して、人より面積を作る人が「篤農家」だとして滋賀県で一番になったもの、お客さんに喜んでもらってこそ農家だという気づきを得て、直売所に続いて農家レストラン事業に乗り出したという。参加者は、採れたて野菜が盛りだくさんのランチでお腹を満たし、散会した。(加藤祐子)